

〔本の紹介〕

清水敏一：大雪山の父・小泉秀雄.

438pp. 2004. ¥4,725円. -. A5版. 北海道出版企画センター.

長野県の植物を語る上で小泉秀雄氏の業績は欠かすことはできない。しかしながら彼の人物像や経歴については、あまり明らかになっていなかった。とくにその植物学上の成果を専門誌や同好会誌に発表することが少なかつたため、評価されにくい印象があった。

著者は山岳史家として、とくに大雪山について集中的に研究し、「大雪山文献書誌」4巻を公表している。その過程で、小泉が大雪山登山・開発の文字通りの先駆者であり、彼が命名した山名が参謀本部の地図に取り込まれ、今日に至っていることを明らかにした。そして上記書誌と前後して、「大雪山わが山小泉秀雄」正・続を公表している。その資料取材の目的で訪れた東京都小金井市の小泉家で、遺品である膨大な数の、極めて精細な植物図が死蔵されているのを知り、これを世に出そうと、小泉の最後の職場であった共立女子薬専の卒業生の協力を得て、「小泉秀雄植物図集」を刊行した。

本書はその後の資料調査の成果を取り込んだ、小泉秀雄研究の決定版である。六章から成り、一、小泉秀雄の生涯、二、大雪山調査行、三、南アルプス調査行、四、北アルプス調査行、五、千島エトロフ島調査行、六、北千島調査行の見出しがついている。第一章は誕生から学歴、職歴、結婚歴を含んで死に至るまでの詳細な記録である。家庭での苦労をかかえながら、大雪山の調査とその成果発表に取り組んだ旭川時代、1920年にはわずか二ヵ月の間に旭川から高知を経て松本へと謎の転職。大雪山の山名についての大論争など、話題にこと欠かない。第二章は著者の本領である、大雪山開発に果たした小泉の役割が語られ、ここ迄で全巻の2/3を費やしている。小泉は家庭では物静かな父親であり、教えを乞う者には親身な師であったが、いざ論争となると、歯に衣着せぬ激烈な論調で、相手を辟易させたようだ。これは松本時代にも発揮されている。とくに権威に対する反発は強烈だったらしい。

第三章以降は松本に定着してからの小泉の活動を記すものだが、小泉自身の記録は極めて乏しいという。これに代わるものとして、横内斎氏の発表した「山野巡歴」「千島エトロフ島植物調査紀行」「北千島植物採集行」「日本南アルプス寒地植物誌」「日本中央アルプス植物誌」などが利用されており、なじみのある方々のお名前もたくさん登場する。横内氏は小泉の野帳を丹念に掘り起こして謄写出版されたが、中にはそれが唯一の公表資料だというものもあるそう。彼は休む間もなく採集旅行に出歩き、出先から押し葉を送ってきて、それを乾燥させるのはミサオ夫人の役割で、吸湿紙を屋根にまで掲げていたという。

成果と追録と題した終章があり、国立科学博物館に引き取られ、標本化が進行中の小泉標本の現状や小泉の遺族について記述されている。小泉は三度結婚し、それぞれ子をもっているが、消息がわからなかった人たちが、前著の出版を期に判明し、その家族を大雪山小泉岳に案内する記事で結ばれている。独学で孤高の境地を築いた小泉秀雄氏を知る、絶好の著書である。なお小泉ミサオ夫人は2004年6月17日、102歳で亡くなられたという。年譜、著作論文一覧(160篇)、人名索引がある。全巻に写真、地図、ノートなど、多くの資料映像がちりばめられ、自然史関係ばかりでなく実業家や文人墨客を含む多数の人物が紹介されている。同じ著者による「知られざる大雪山の画家・村田丹下」(北海道出版企画センター、2003年)があり。ここにも小泉の名が各所に見られるので、合わせて参考になる。なお入手については著者自身に申し込まれば、送料は著者が負担するとのことである。連絡先:068-0835 岩見沢市緑が丘5-166(TEL 0126-23-4570)

(金井 弘夫)